

亡び行く江戸趣味

淡島寒月

江戸趣味や向島（むこうじま）沿革について話せとの御申込であるが、元来が不羈放肆（ふきほうし）な、しかも皆さんにお聞かせしようと日常研究し用意しているものでないから、どんな話に終始するか予（あらかじめ）めお約束は出来ない。



人はよく私を江戸趣味の人間であるようにいつているが、決して単なる江戸趣味の小天地に跼蹐（きよくせき）しているものではない。私は日常応接する森羅万象（しんらばん）しように親しみを感じ、これを愛玩（あいがん）しては、ただこの中にプレイしているのだと思っている。洋の東西、古今を問わず卑しくも私の趣味性を唆（そそ）るものあらば座右に備えて悠々自適（ゆうゆうじてき）し、興来って新古の壺巻（ひもと）け

ば、河鹿笛（かじかぶえ）もならし、朝鮮太鼓も打つ、時にはウクレルを奏しては土人の尻振りダンスを想って原始なヂャバ土人の生活に楽しみ、時にはオクライナを吹いてはスペインの南国情緒に陶醉（とうすい）もするまたクララ・キンベル・ヤングやロンチャニ―も好愛し、五月信子や筑波雪子の写真も座臥（ざが）に用意して喜べる。こういう風に私は事々物々総（すべ）てに親愛を見出すのである。



オモチヤの十徳（じゅつとく）

- 一、ト―イランドは自由平等の楽地也（なり）。
- 一、各自互に平和なり。
- 一、縮小して世界を観ることを得。
- 一、各地の風俗を知るの便あり。
- 一、皆其（そ）の知恵者より成れり。
- 一、沈黙にして雄弁なり。
- 一、朋友と面座上に接す。
- 一、其（そ）の物より求めらるゝの煩なし。

一、依之（これによりて）我を教育す。
一、年を忘れしむ。

皆おもちや子供のもてるものゝみを

それと思へる人もあるらむ

これが、私が応接する総てを愛玩出来る心
で、また私の哲学である。従って玩具を損失
したからとて、少しも惜いとは思わない。私
は這般（しゃはん）の大震災で世界の各地か
ら蒐集（しゅうしゅう）した再び得がたい三
千有余の珍らしい玩具や、江戸の貴重な資料
を全部焼失したが、別して惜しいとは思わな
い。虚心坦懐（きょしんたんかい）、去るも
のを追わず、来るものは拒まずという、未練
も執着もない無碍（むがい）な境地が私の心
である。それ故私の趣味は常に変遷転々（へ
んせんてんてん）として極まるを知らず、た
だ世界に遊ぶという気持で、江戸のみに限ら
れていない。私の若い時代は江戸趣味どころ
か、かえって福沢諭吉先生の開明的な思想に
鞭撻（べんたつ）されて欧化に憧れ、非常な

勢いで西洋を模倣し、家の柱などはドリック
 に削（けず）り、ベッドに寝る、バタを食べ
 頭髮までも赤く縮（ちぢ）らしたいと願った
 ほどの心酔ぶりだった。そうはいえ私は父か
 ら受け継いだのか、多く見、多く聞き、多く
 楽しむという性格に恵まれて、江戸の事も比
 較的多く見聞きし得たのである。それもただ
 自らプレイする気持だけで、後世に語り伝え
 ようと思うて研究した訳ではないが、お望み
 とあらばとにかく漫然であるが、見聞の一端
 を思い出づるままにとりためもなくお話して
 見よう。



古代からダークとライトとは、文明と非常
 に密接な関係を持つもので、文明はあかりを
 伴うものである。元禄時代の如きは非常に明
 （あかる）い気持があったがやはり江戸時代
 は暗かった。



花火について見るも、今日に較（くら）ぶ

ればとても幼稚なもので、今見るような華やかなものはなかった。何んの変哲も光彩もなただの火の二、三丈も飛び上るものが、花火として大騒ぎをされたのである。一体花火は暗い所によく映（は）ゆるものであるから今日は化学が進歩して色々のものが工夫されているが、同時に囲りが明るくされているので、かえってよく環境（かんきよう）と照映しない憾（うら）みがある。



昔から花火屋のある処は暗いものの例となっている位で、店の真中に一本の燈心を灯しこれを中心（めぐ）って飾られている火薬に、朱書（しゅがき）された花火という字が茫然と浮出（うきだ）している情景は、子供心に忘れられない記憶の一つで、暗いものの標語に花火屋の行燈（あんどん）というが、全くその通りである。当時は花火の種類も僅（わず）かで、大山桜とか鼠（ねずみ）というような、ほんのシューシューと音をたてて、地上にただ落

ちるだけ位のつまらない程度のもので、それでもまたミケンジャクや烏万燈等と共に賞美され、私たちの子供の時分には、日本橋横山町二丁目の鍵屋（かぎや）という花火屋へせつせと買いに通ったものである。



芝居について見るも、今日の如く照明の発達した明るい中で演ずるのではなく、江戸時代は全くの暗闇で芝居しているような有様であつたので、昔は面（つら）あかりといつて

長い二間もある柄のついたものを、役者の顔前に差出して芝居を見せたもので、なかなか興きがあつた。人形芝居にしても、今日は明るいためにかえって人形遣いの方が邪魔になつてよほど興きを打壊すが、昔は暗い上に八つ口だけの赤い、真黒な「くろも」というものを着付けていたので目障（めざわ）りではなかつた。あるいは木魚（もくぎょ）や鐘を使ったり、またバタバタ音を立てるような種々の形容楽器に苦心して、劇になくてはなら

ない気分を相応に添えたものである。芝居の時間も長くはねは十二時過ぎから一時過ぎに及び、朝も暗い中（うち）から押（おし）かけて行くという熱心さで、よく絵に見かけの半身を前に乗り出すようにして行く様があるが、どんなに一生懸命であつたかを実証している。



昔はまた役者の簪（かんざし）とか、紋印がしてある扇子（せんす）や櫛（くし）など

を身に飾って狂喜したものだ。で役者の方でも、狂言に因（ちな）んだ物を娘たちに頒（わか）って人気を集めたもので、これを浅草の金華堂（きんかどう）とかいうので造っていた。当時の五代目菊五郎の人気などは実に素晴らしいもので、一丁目の中村座を越えてわざわざ市村座へ通う人も少くなかった。



前述もしたように、とにかく江戸時代は暗かった。だが文明は光を伴うものである。我

国には古くから八間という燈（あかり）があ
 った。これは寺院などに多くあるもので、実
 際は八間はなかったが、かなり大きいのでこ
 の名がある。また当時よく常用されたものに
 蠟台（ろうだい）がある。これは蠟燭（ろう
 そく）を灯すに用い多く会津（あいづ）で出
 来た、いわゆる絵口（ソク）を使ったもので、
 今日でも東本願寺など浄土宗派のお寺ではこ
 れを用いている。中には筍形（たけのこ）がた
 をしたのもあった。また行燈に入れるものに
 「ひょうそく」というものを用いた。それか
 ら今でも奥州方面の山間へ行くとある「でっ
 ち」というものが使われた。それは松脂（ま
 つやに）の蠟で練（ね）り固めたもので、こ
 れに類似した田行燈というものを百姓家では
 用いた。これは今でも一（いち）の関（せき
 辺へ行くと遺（のこ）っている。



支那から伝来して来た竹紙（ちくし）とい
 う、紙を撚合（よりあわ）せて作った火縄（

ひなわ）のようなものがあつたが、これに点火されておつても、一見消えた如くで、一吹きすると火を現わすのでなかなか経済的で、煙草の火附（ひつけ）に非常に便利がられた。また明治の初年には龕燈提灯（がんどうちょうちん）という、如何に上下左右するも中の火は常に安定の状態にあるように、巧（たくみ）に造られたものがあつたが、現に熊本県下にはまだ残存している。また当時の質屋などでは必らず金網のボンボリを用いた。これはよそからの色々な大切なものを保管しているもので、万一を慮（おもんぱ）かつて特に金網で警戒したのである。



明治時代のさる小説家が生半可（なまはんか）で、彼の小説中に質屋の倉庫に提灯を持つて入つたと書いて識者の笑いを招いた事もある。越えて明治十年頃と思うが、始めて洋燈（ランプ）が移入された当時の洋燈は、パリーだとか倫敦辺（ロンドンあたり）で出来

た舶来品で、割合に明（あかる）いものであったが、困ることには「はや」などが壊（こわ）れても、部分的な破損を補う事が不可能で、全部新規に買入れねばならない不便があった。石油なども口を封蝋（ふうろう）で缶（かん）してある大きな缶入（かめいり）を一缶（ひとかん）ずつ購（もと）めねばならなかった。



そんな具合でランプを使用する家としては、

ほんの油町に一軒、人形町に一軒、日本橋に一軒という稀（まれ）なものであったが、それが瓦斯燈（ガスとう）に変わり、電燈に移って今日では五十燭光（しよっこう）でもまだ暗いというような時代になって、ランプさえもよほどの山間僻地（さんかんへきち）でも全く見られない、時世の飛躍的な推移は驚愕（きょうおつ）（きょううがく）の外はない。瓦斯の入来したのは明治十三、四年の頃で、当時吉原（よしをら）の金瓶大黒という女郎屋の主人が、東

京のものを一手に引受けていた時があった。
昔のものは花瓦斯といって焰の上に何も蔽（
おお）わず、マントルをかけたのは後年であ
る。



江戸から東京への移り変りは全く躍進的で
総てが全く隔世（かくせい）の転換をしてい
る。この向島も全く昔の倅（おもかげ）は失
われて、西洋人が讚美し憧憬する広重の錦絵
（にしきえ）に見る、隅田の美しい流れも、

現実には煤煙（ばいえん）に汚れたり、自動
車の煽（あお）る黄塵（こうじん）に塗（ま
み）れ、殊に震災の蹂躪（じゅうりん）に全
く荒れ果て、隅田の情趣になくてはならない
屋形船（やかたぶね）も乗る人の気分も変り
型も改まって全く昔を偲（しの）ぶよすがも
ない。この屋形船は大名遊びや町人の札差（
ふださ）しが招宴に利用したもので、大抵は
屋根がなく、一人や二人で乗るのでなくて、
中に芸者の二人も混ぜて、近くは牛島、遠く

は水神の森に遊興したものである。



向島は桜というよりもむしろ雪とか月とかで優れて面白く、三囲（みめぐり）の雁木（がんぎ）に船を繋（つな）いで、秋の紅葉を探勝することは特によろこばれていた。季節々々には船が輻輳（ふくそう）するので、遠い向う岸の松山に待っていて、こっちから竹屋！ と大声でよぶと、おうと答えて、お茶などを用意してギッシギッシ漕（こ）いで来

る情景は、今も髣髴（ほうふつ）と憶（おも）い出される。この竹屋の渡しで向島から向う岸に渡ろうとする人の多くは、芝居や吉原に打興（うちきよう）じようとする者、向島へ渡るものは枯草の情趣を味うとか、草木を愛して見ようとか、遠乗りに行楽しようとか、いずれもただ物見遊山（ものみゆざん）するもののみであった。



向島ではこれらの風流人を迎えて業平（な

りひら）しじみとか、紫鯉とか、くわいとか
 芋とか土地の名産を紹介して、いわゆる田舎
 料理麦飯を以（も）って遇し、あるいは主と
 して川魚を御馳走（ごちそう）したのである
 またこの地は禁猟の域で自然と鳥が繁殖し、
 後年掟（おきて）のゆるむに従って焼き鳥も
 また名物の一つになったのである。如上捕捉
 （ほそく）する事も出来ない、御注文から脱
 線したとりとめもないものに終ったが、予め
 お断りして置いた通り常にプレイする以外に

研究の用意も、野心もない私に、組織的なお
 話の出来ようはずがないから、この度はこれ
 で責（せめ）をふさぐ事にする。

（大正十四年八月二十四、五、六日『日本新
 聞』）

底本：「梵雲庵雑話」岩波文庫、岩波書店

1999（平成11）年8月18日第

1刷発行

・ このファイルは W3C 勧告
XHTML 1.1 にそった形式で作成さ
れています。

・ 傍点や圏点、傍線の付いた文字
は、強調表示にしました。

辺境文庫にてPDF製本

2007年7月21日作成